

第4回 旭川市民文化会館の在り方検討会 会議録（要旨）

会議名	第4回 旭川市民文化会館の在り方検討会
開催日	令和4年10月7日（金） 午後1時30分から午後3時10分まで
出席者 （敬称略）	参加者 全8名出席 五十嵐 真幸，伊藤 誌麻，上田 信津子，佐藤 淳一， 鈴川 雄太，竹田 郁，南 裕一，森 傑 事務局 5名出席 社会教育部長，社会教育部次長，文化ホール担当課長， 市民文化会館長，市民文化会館主任
会議の公開非公開の別	公開
傍聴者数	2名
会議資料	別紙のとおり

1 開会

2 議事

進行役：

本日の議事は

- （1）第1回～第3回会議での意見の振り返りに基づく意見交換
- （2）大規模改修と建替えの比較に関する意見交換
- （3）旭川市民文化会館の整備の方向性に関する意見交換

の3点であるが、まず（1）として第1回から第3回会議での意見を整理した資料について、事務局より説明いただく。次に（2）として、これまでの議論の中で事務局が収集した情報や皆様の御意見、私からお話した建築的な視点での改修と建替えの特徴について整理した資料を事務局から説明いただく。（1）（2）について、質問・確認・追加の御意見等があればいただきたい。

最後に（３）は整備の方向性として「大規模改修と建替えのどちらが妥当と考えるか」ということについて、議論の感想を含め、率直な御意見を一通り伺いたいと思う。これはどちらが正しいという話ではなく、これまでの情報を踏まえた上で「自分はこちらの方が良いと考える」といったことをぜひ御発言いただきたいと思う。

最初に、議事の「（１）第１回～第３回会議での意見の振り返りに基づく意見交換」に係り、事務局より説明願いたい。

事務局：

資料の「１ 第１回～第３回会議での意見の振り返り」に基づき説明

進行役：

資料の「（１）現市民文化会館の現状と課題に関する意見」から順番に追加の御意見や御質問、ぜひここを強調したいという部分があればお聞きしたい。

なお、私から追加するとすれば、「③機能性」として搬入路や利用環境に関する意見が挙げられているが、そもそも利用側の視点と演者側の視点、両面の課題があると思う。利用者側の視点については「②ユニバーサルデザイン」に近いが、演者側の視点としては、例えば楽屋やリハーサル室、さらにはそもそも演奏・劇に際して音響・照明等の設備環境などが現代的でないために、やや使い勝手が悪くなっていることが第１回会議時の見学に際して感じられた。これまでの議論を振り返りながら、その辺りの意見を拾い上げていただきたいと思う。

続いて、資料の「（２）市民文化会館の今後の整備に関する意見」に関して、御質問や御意見があればお聞きしたい。

参加者：

ホール機能に関する意見のところは、あまり触れられていないと思ったが、大ホールは少し大き過ぎる気がする。1,200席や1,300席程度でも良いのではないか。どうしても音響の悪い部分が出てきてしまうという指摘がある。

また、小ホールは、演者にとって舞台が狭過ぎて使いづらいという感じがあるが、演者と観客の距離が近くにあるということが一番大事ではないかと思う。

参加者：

大ホールの席数については、学会や式典を行う場合を考えると、最低でも1,500席程度は必要になると思う。札幌以北に同程度の規模がないことを考えても、市の施設ではあるが、道北地域全体のことを考えたときに、1,500席という規模は必要になるのではないか。

また、小ホールについては、費用もかかると思うが、思い切って100席くらいの可変式客席にする考え方もあって良いかと思う。

進行役：

例えば、中学校・高校の吹奏楽部や市民団体が演奏等で使用する場合には、1,500席では持て余す場面が出てくる。一方で、興行・ビジネスの面から考えると、どれだけ人を入れられるかということが重要になる。

今、御指摘があったように、まず一つ大事なことは、芸術文化的なホールとした場合に、北海道内におけるこの施設の位置付けをどう考えるのかということ。芸術寄りのものとするのか、市民活動寄りのものとするかによって、コンセプトが大分変わってくる。25～30年くらい前から「多目的ホールは無目的ホールだ」として、何でもできるように設計したら、全部が中途半端になるという批判が続いており、それを考えたとき、北海道であるとか、北北海道である種の役割分担が必要になる。

例えば、本州のとあるホールは、抜群に音響が良く、音楽に特化することで、地方に所在しているが全国から人が来る。

座席数の議論については色々な視点があるので、御指摘があった部分を踏まえて、今後考えていく必要があるということも明記いただくと良いと思う。

参加者：

文化会館の小ホールは演奏家にとって大切なリサイタルの場であるが、使い勝手と音響が良くないため、演奏で使う人は少ない。一方で、神楽市民交流センターの木楽輪（きらりん）は、狭いが使う人がとても多く、私自身も利用している。いかに座席数が多く建物が立派でも、音が良くなければ利用されない。主催者・演者として使用する側の視点からいえば、やはり音響等の機能面が一番大切になる。

また、アーティストのライブやオーケストラの公演、その他興行等で、札幌と他の道内地方都市に行くが旭川市には来ないということが、人口30万人という都市規模の割に多いように思う。もし、文化会館の音響や使い勝手など、施設設備の問題が影響しているとしたら、そうした面を重視した整備を行うことで、アーティストをはじめ外部の方々からも、そして市民の方々からも目が向けられるものとなり、市民に造って良かったと思ってもらえる、価値を実感してもらえる施設になるのではないか。

進行役：

今のお話も、ぜひ加筆していただきたい部分の一つ。札幌には来るけれども旭川には来ないといったとき、その理由をきちんと分析せず、漠然と印象で判断しながら、公共施設を計画しているケースが多いように思う。それは施設の機能性や規模によって札幌以外を選択してないのか、あるいは例えば、アーティストの公演等で北海道内2か所を回るというスケジューリングがそもそも難しいのか。

こうした部分については、今後構想・計画に際して施設のスペックを定める上で、情報収集と分析が必要になると思うので、加筆いただきたい。

参加者：

文化会館では、昨日から、今年度でも一番目・二番目の規模の学会が開催されている。コンベンションの観点からいえば、ホールの座席数は改めて分析が必要と思うが、例えば学会等では、座席に収納可能な机などがあれば良いと思う。

また、前回までの会議でも触れてきたが、旭川は家具やデザインのまちなので、音響も含め、ホール内の機能にしっかりお金をかけて、旭川らしく魅力的なものにできれば、見学のために旭川へ来たいという切り口になるかもしれない。どこを尖らせていくかという部分は議論と分析が必要であるが、そうした視点もあると良い。

進行役：

大規模改修にせよ建替えにせよ、機能性や座席数を検討する上で考えなければならないのは、文化会館で全てを担おうとするのかどうかという点。例えば、文化会館は大規模なイベント等をカバーするよう整備し、音響が必要な部分は、他施設の音響性能を上げるような整備をするといった役割分担もできるかもしれない。そうした視点から、市が現在保有している公共施設との役割分担という部分も、ホール機能の検討に際して、すごく大事になると考えている。

また、学会は非常に多くの参加者が見込まれるため、小さなまちではホテルが全く足りず、開催できないということになる。

最近では、大学を学会の開催会場とする際に、相応の使用料を徴収するようになり、学会を大学で開催しても民間のホテルを借りても、金額的にあまり変わらなくなってきた。こうした状況を踏まえると、積極的に旭川で学会を受けるということを考えたとき、民間との連携・分担という部分も重要になってくると思う。

続いて「(3) 場所に関する意見」に関しては、前回の会議で色々な意見が出ていたと思う。改めて場所に関して、何かアイデアや希望等があればと思うが、いかがか。

学会の関係では、北大で開催されることも多いが、外部から来る方にとって、札幌駅からほぼ直結しているという地理的条件が大きい。北海道に来て、さらに何時間も移動するというのは、道外の人にとって結構大きなハードルになる。アクセスのしやすさ以外にも、飲食店等が近くにあり、ホテルにもすぐ行けるという立地が好まれているように感じる。学会の開催場所として中心部が望ましいとされる場合が多いのは、そうした視点からのものである。

参加者：

本日文化会館で開催している学会も、OMO7とアートホテルを含めた三会場で共同開催しているが、その距離でも、シャトルバスが運行している。寒いというのもあるし、遠くから来たお客様が便利という部分もある。

コンベンションに限ったことではないが、やはり立地に関して一番大事なのは、駅から近いことと、ホテルから近いことだと思う。

進行役：

シャトルバスにも費用がかかるので、それを削れるかどうかという部分も大きい。とある学会では、地方の中心都市から会場まで車で1時間程度かかるというだけで、一部の人は参加を見送ったということもあった。今後、学会もオンラインとのハイブリッド形式は残ると思うので、その中で積極的に人に来てもらいお金を落としてもらおうということを考えると、滞在環境は大事になる。

この点は、ホールや劇場でも一緒なのだろうか。演劇や音楽の鑑賞に際して、熱心なファンの方であれば公演だけのために行くということもあると思うが、前後の滞在が立地とも関係する場合もあるだろうか。この点、御意見などあれば伺いたい。

参加者：

以前、地方のコンサート会場で旭川の観光案内をしたことがある。旭川のコンサートに行く際は、先行で泊まって滞在し、旭山動物園に行くのを楽しみにしているとのことであった。

また、100人程を対象にアンケートを取ったことがあるが、観光と絡めて興行に行くという意見が多かった。どんな会場かということに加え、どんな場所なのかということも大切だと思う。開催場所に魅力がなければ、コンサート等には行かないという方もいるかもしれない。

進行役：

実際の滞在を考えると、より広域に、前後の宿泊も含めたプランを立てたくなるような環境というのも大事な要素だと思う。

続いて、「(4) 費用対効果」に関して、この点はこれ以上掘みようがないかもしれない。コストパフォーマンスは、新しくするにせよ、使い続けるにせよ、必ず考えなければならないことである。

追加していただきたいのは、コストにはイニシャルコストとランニングコストの二種類があるということ。更新するとき、建てるときの初期費用がイニシャルコストであり、使っていく中での光熱費とか維持管理費等のランニングコスト、その両面での費用対効果というものを考えるべきかと思う。

大規模改修の方がイニシャルコストは抑制できるが、例えばエアコンの効きが良くなるわけではなく、建替えに比べて光熱費等のランニングコストはかかりがちになる。仮に建替えの場合に近いくらい光熱費を抑制可能な造りにする場合、改修時に断熱性能をものすごく上げる、設備を全部取り替えるなど、イニシャルコストの段階でそれ

くらいのことをしないと、効率的な光熱費にはなっていない。そうした部分も加筆した方が良くと思う。

参加者：

直接ホールに関する費用対効果になるか分からないが、駐車場に関して、現在の第3庁舎跡地を市役所の駐車場にすると聞いた。仮に、市の現庁舎を解体した跡地に文化会館を建替えるとして、ホール利用者も見込んで地下駐車場を再整備とした場合、動線や出入りの際の混雑等を考えたとき、すごく効率が悪いと思う。

現在の7条地下駐車場を見ると、平日はそんなに使われていない。また、今後高齢化が更に進行していく中で、道路を渡ったり、地下から階段を上がらなければアクセスできない駐車場というのは、造る価値があるのか疑問。

それよりは、庁舎周辺の土地を広く使って駐車場を造ったり、緑化して公園のように整備するなどして、庁舎と周辺を利用しやすい環境を整える形とし、文化会館は別の場所に建替えるのが良いのではないか。

進行役：

今の指摘は（1）の機能性と、（4）のコストの話、両方に関わる意見として記入いただくと良いと思う。利用者目線からすると、駐車場が平面駐車場か立体地下駐車なのかによって、来やすさが変わってくるという機能性の話かと思う。

一方で、地下駐車場は平面での整備と比べると、非常にお金がかかるので、地下駐車場を設けると多くの場合は有料になる。設置に要する費用をを回収しなければならないので、有料駐車場になったとき、その有料という感覚が旭川市で許容されるのかどうかという課題もある。札幌は払わないと仕方がないという感覚が標準的であるが、地方に行くと何で駐車場代を払わないといけないんだと言われるところも多い。旭川市は大きな都市なので、ある程度許容されると思うが、その辺りも考えていく必要があると思う。

なお、経営的な視点で考えると、駐車場で収益を上げようとする視点もある。都心部であれば、一部を契約駐車場にして、周りのオフィスに勤務する方が利用する駐車場として提供する仕組みもある。費用対効果に関しては、立地や建て方によって、必要となる費用が大幅に変わる可能性があるという点も、うまく入れておいていただきたい。

また、費用対効果と運営方法に関する補足として、この施設規模になると職員数も一定程度必要になることから、その人件費をどう考えるのかという大きな課題がある。

文化会館は現在直営であり、公務員の方が職員として従事しているが、例えば指定管理等になると、公務員でない方が従事することになる。苫小牧市はPFIで整備するが、PFIの一番特徴的な仕組みとして、SPCという会社が経営することになるので、民間組織の方が職員を担う。このとき、どのくらいの人数がどのような仕組みで従事

するのにかよって、経営・運営に係る人件費はかなり変わってくることになる。

ここまではハード的な話があったところであるが、ランニングコストに係る部分として、どのように人員を回していくのかという部分も考える必要がある点について、施設運営に関して追記いただければと思う。

続いて議事の「(2) 大規模改修と建替えの比較に関する意見交換」に係り、事務局より説明願いたい。

事務局：

資料の「2 大規模改修と建替えの比較」に基づき説明

進行役：

この比較表について、御質問や御意見はないか。

参加者：

平成 26 年度時点における大規模改修費の積算額が約 35 億円とのことであったが、感覚的なものでも構わないが、今だと概算でどの程度の金額になるものだろうか。

また、仮に大規模改修を行うという方向性になった場合、もう一度改めて積算することになるのか。

進行役：

あくまで感覚的なものとして、8 年前からの上昇率を考えると、15%程度の増というところかと思う。ただ、日本は輸入に頼っているので、直近 1～2 年の世界的な物価高と円安の影響は非常に大きくなると思う。場合によっては 20～25%増となる可能性も考えられる。10%増の場合で 38 億 5,000 万円になるので、15%増で約 40 億円、20%増で 42 億円といった感じになるかと思う。

また、仮に大規模改修を行う場合は、再度積算を行うことになる。

参加者：

大規模改修を行った場合の使用年数は、最大で 20 年程度であり、状況により更に短くなる可能性もあるという認識で良いか。

また、東京など積雪のない地域での 20 年間と、積雪のある寒冷地における 20 年間とでは、やはり建物の劣化速度等は違うものだろうか。

進行役：

20 年より短くなる可能性も想定される。これも前々回の会議で申し上げたかもしれないが、耐用年数には物理的な面と機能的な面があり、大抵の場合、機能的な面で

今日的な仕様に追いつかないということになる。

また、物理的な面では、昭和の仕様のコンクリート造は、大体 60～70 年くらいが耐用年数になる。文化会館は既に築 48 年ということで、約 50 年とすると、20 年後には約 70 年となり、例えばコンクリートの柱の一部がぼろぼろと崩れるといったことが起こり得るということである。

寒冷地であることに関しては、昭和期の建築に関しても、積雪寒冷仕様を念頭において造られているが、現代に比べると技術研究が進んでいたわけではないため、やはり劣化は否めない。例えば、結露や凍結の対策は現代に比べ十分ではなかったもので、旭川のように気温の高低差が大きな場所では、影響もあるかと思う。

参加者：

建替えの場合、イニシャルコストとして建設費が 90～100 億円程度とあるが、ランニングコストに関して、使用可能年数として想定される 80 年間に、小規模改修等が別途必要になるのだろうか。また、必要となる場合、費用はどの程度になるか。

進行役：

小規模なものだけでなく、大規模な改修も入ることになる。大体 20～25 年に一度、80 年間に計三回ぐらい、施設規模にもよるが、何億円という単位で費用が発生する。これは今回建替えと比較されている「大規模改修」とは内容が異なり、大規模な構造強化等は含まない。内装の整備や、設備機器の交換等が主になると想定される。

今、文化会館のように昭和の建物が困ったことになってきているのは、そうした改修費用をかけてこなかったため。現代の建物は、マンション等にしても、建築時点で改修のスケジュールを組み、費用を積み立てていくので、昭和に建てられた建物が劣化するスピードよりも、これから建設される建物の方が、劣化するスピードは遅いと思われる。

ランニングコストについては、冷暖房など機械的な効率や建物が高气密高断熱になるなど、大規模改修よりは、建替えの方が抑えられるということになる。

参加者：

収益の部分はどうなるのか。仮に建替えを行い 100 億円をかけた場合、今よりもどのぐらい賃料を高く設定でき、収入の増を見込めるようになるものだろうか。また、大規模改修をした場合も、何か新たな利益を生む要素はないものだろうか。

進行役：

施設の利益に関しては、公共施設として、二点考えなければならないところがある。まず、公共施設は基本的に収益施設ではないという前提がある。例えば、日本では公民館などを利用する際、安価とはいえ料金を徴収することがほとんどであるが、ヨ

ヨーロッパ等では、国民であれば美術館でも無料ということが多い。そもそも公共施設の利用とは、税金を払っている人の権利という考え方が根幹にあるので、公共施設を有料で使わせるというのは、本来の筋からすると、少しずれた話になる。ではなぜ芸術ホール等で料金を徴収するかといえば、全市民が平等に使うような類の施設でなく、利用者が偏るためである。

先程の興行寄りの施設にするか、市民利用寄りの施設にするかという話であるが、市民利用寄りというのは、公共施設は市民のためのものという立ち位置を強くすれば、市民が誰でも使えるよう、できるだけ低廉な価格に使用料を設定する必要がある。そこで最初の建設費が高額になると、運用の中で回収していかなければならなくなり、そこにも税金がかかってくるので、最初の建設費をできるだけ安価に設定しようという考え方がある。

一方で、公共施設であるが、ほかにも市民が利用可能な施設があるので、この建物についてはもっと違う意味での旭川市の活性化を目指すために、相応のスペックをもたせて、全市民が使うというより外の人を意識しながらお金を払ってもらって使うという位置付けをするという考え方もある。

これは、最初に「公共施設としてのホールをどう考えるのか」というベクトルを議論しないといけないところがある。仮に後者とする場合は、こういうスペック、こういう設備に投資してこれだけの金額をかけるが、それに見合った観客が来るという見込みを立て、使用料を設定し、使っていただくという形を考えていくことになると思う。公共施設という部分と、民間ホールとの違いというのは、一つのラインとして今後議論していく必要がある。

事務局：

旭川市の使用料算定の考え方については、受益と負担の適正化の考え方があり、施設の維持管理費や人件費を面積で割り返して算定するという方法になっている。例えば特定の市民しか利用しない施設に関しては、受益者負担が100%の施設もあり、また公民館であれば50%となっている。

現行の使用料算定の方法には、減価償却等の考え方は入っていないため、仮に建物が改修されリニューアルしたとしても、その部分が反映され、大きく料金を上げることができるかということ、難しい部分がある。

進行役：

それは今後考えなければならない課題になると思う。良いスペックの施設を建てれば、ランニングコストをあまりかけていなくても、最初の費用として財源として何億の単位で税金を投入しているので、その論理はカバーしないといけないと思う。

これは決して悪い話ではなく、PFIではこの部分を重視する。民間事業者に公共サービスの質を保ったまま収益性を上げてもらうことで、行政の仕組みとしてできるこ

とを超えるお金の回収を狙っていただくという仕組みになる。

現行の施設使用料の算定方法については、今後施設をどう整備するかによって、料金や回収の仕組みを変えていくことも検討していく必要があると思う。

続いて議事の「(3) 旭川市民文化会館の整備の方向性に関する意見交換」について、今までの議論を含め、今回こうした考え・こうした印象をもったので、大規模改修の方が良いのではないかと、あるいは建替えの方が良いのではないかとといった御意見を、順番に皆様から伺いたいと思う。

参加者：

これまで議論を重ねてきた中で、今のところは建替えの方に考えが及んでいる。それは大規模改修の費用が約 40 億円で 20 年程度しかもたないのに対し、建替えの場合は 90 億円から 100 億円を要するとはいえ、7～80 年もつという点が大きい。

また、現状のホールの在り方・機能面やユニバーサルデザイン的な面から見ても、現代の要求に合ったものではない。

加えて、20 年後の旭川市の人口推計を調べたところ 25 万人前後とされており、体力がどんどん落ちていくと思う。20 年後に 100 億円用意できるかといえば、そもそも建てること自体がもう議論にならないかもしれない。20 年後、100 億円から上がることはあっても、安くなるということはないと思う。一方で旭川市としての勢いは確実に落ちていくと思うので、そうした中で次世代の方々に良いものを残さなければならない。今の建物を残すよりは、このタイミングできちんと整備するべきと思う。

また、80 年後の旭川市の人口推計も調べたが、現在の状況と同様に推移した場合は、9 万人程度と推計されており、理想的な推計でも 20 万人を切るとのことであった。80 年後というタイミングであれば、規模に合ったものを改めて検討することもできると思うが、現在の世界情勢や円安等の状況を考えたとき、仮に今、大規模改修を行い、20 年後に建替えを検討するというのは、タイミングとして妥当かという点と疑問がある。

また、先日開催された旭川市民文化会館運営審議会でも意見があり、コンクールや大会等の大規模催事は文化会館があることを前提として開催しており、仮に 1 年以上使用できない期間が発生すると、道北地域に代替可能な施設がないため、開催自体が不可能になってしまうとのことであった。

一般的な市民団体等の利用であれば、1 年～1 年半の間、発表を休めば良いという話で済むかもしれないが、例えば小学生や中高生にとって、その瞬間しかないもの、かけがえのない時間が 1 年～1 年半の間なくなってしまうというのは、非常に厳しいのではないかと。対して、他の場所へ建替える方法が採れれば、それを何とか回避することができる。

建替えは、費用が高額であり、慎重に考えなければならないが、以上のことを踏ま

えると、現時点では建替えの方が妥当と考えている。

参加者：

建替えが良いのではないかと思う。約 35 億円をかけて 20 年程度というのは、中途半端と感じる部分もある。どうせならば素晴らしいものを造って、未来ある子供たちに継承していきたい。

また、1 年間から 1 年半程度文化会館が使用できず、代替施設もないというリスクは、地元の方や今まで使ってこられた方たちにとって非常に影響が大きいと思う。その点からも、どこか別の場所に建替えというのが望ましいと思う。

進行役：

本当に代替可能な場所はないのか。市内になくとも、近隣市町村に借りられるという可能性はないか。

参加者：

近隣でいうと鷹栖町の「たかすメロディホール」があるが、500 席程度しかない。札幌市であれば仮に Kitara が 1 年半休館しても、代替施設があると思う。

また、大きな大会や研修会の場合、移動を考えると、ホテルや駅から会場が近いということは理想。シャトルバスが出ていても、会場が遠くなると参加率が下がる。参加率が下がると資金調達が困難になり、目指すものができなくなってしまい、結果的に逆効果になってしまう。

進行役：

反対の立場ということではなく、議論のために指摘させていただくが、便利さを考慮すると、使い続けられることが一番良いのは当然のことである。しかし、1 年～1 年半の間、工夫をすれば何とかうまく調整できるという方法があるとすれば、そうした議論を素通りするのは好ましくない。

本当に休館できないのか、仮に何とか頑張って知恵を絞って対応できたとして、そのためにどの程度の手間とお金がかかるかということ踏まえた上で判断するという部分は、押さえておく必要もあると思う。

事務局からは休館期間発生時の代替案などないか。

事務局：

仮に周辺のお施設を使うとしても、規模を小さくして実施いただくほかはないと思う。過去にアスベストの関係で文化会館が臨時休館となった際には、公会堂を会場に複数回に分け成人式を実施した例はある。

なお、近隣で最も多い座席数のホール施設は、公会堂で約 700 席、その次がクリス

タルホールで約 600 席，その次がたかすメロディホールで約 500 席になる。ただし，それぞれ席数だけでなくステージの広さ等も異なるため，そうした面でも大ホールと同程度の規模で催事を行うというのは，難しいと思われる。

今回の会議では，周辺市町の施設の情報も参考資料として用意したい。

進行役：

施設の整備の方向性の結論を出す際に，感覚的に施設の休館期間が嫌だというのは，議論としては，曖昧な点もあるので，しっかり押さえておく必要があると思う。

参加者：

建替えの方が望ましいと考える。コンベンションの観点からいくと，旭川は札幌以外で医科大学があり，赤十字病院等の大きな病院もあるので，1,000 人以上規模の学会を招致可能なポテンシャルがある。観光やコンベンション等，広域的に近隣都市との連携を考えても，旭川にしっかりとした新しい施設があると，非常に誘致しやすい。また，大規模改修のために休館期間が発生すると，学会等の場合は 2～3 年前に開催地等を決定するため，その前後で誘致できない状況が続いてしまう。

また，前回の会議で文化会館の移転先の場所として，日章小学校を挙げたが，現にしっかりとした校舎があるので補足するが，近隣に勤労者福祉会館や建設労働者福祉センター（サンアザレア）等があり，これら施設は老朽化して，暖房など設備の問題も生じている。1,000 人規模のコンベンションであれば，会議室を 15 室程度使用するため，結局は併催するホテル等が必要になるが，日章小学校の近隣には，利用できるホテルも複数ある。

こうした条件を満たす場所として，日章小学校の周辺ということで例示したものであり，仮に新しく文化会館を建替えることとなった場合，立地場所の検討に際しては，周辺施設の状況ということも考慮の上，議論いただきたいと考えている。

進行役：

旭川には空港があり，直に東京とつながっているところがとても大きい。この点は，ポジティブに考えると興行的にもすごくメリットがあり，造り方によっては，その可能性も広げられるかもしれないと思う。

参加者：

今までの議論を聞いてきて，この流れだから建替えと思う一方，その流れがあまりにも自然過ぎて，この流れに乗ってしまっても良いのかという思いもあるが，現時点の機能を考えると，20 年後にまた大きな負担をするよりは，やはり建替えをすべきと思う。

その上で，やはり「何のための施設なのか」ということを本当に考えないといけな

い。文化というものがどうしてまちに必要なのかと考えたとき、地方都市がどんどん合理化されていく中で、映画館や本屋さんがなくなっていくというように、文化芸術というものが一番最初になくなっていく。現代において、地方格差はお金の面だけでなく、文化の面でも埋められなくなってきたと言われるが、良い芸術に触れる環境があるということが、未来の人材を育てていくものと思っている。

文化会館は、芸術として良いものに出会える場所・機会だと考えていて、使い勝手の良し悪しなどもあるが、文化芸術として良いものに出会えるよう、音響等には最低限配慮すべきと思う。

また、地域とのつながりという視点では、どんどん孤立している人が増えていく中で、多様な人が利用できる施設であるべきと思うが、旭川市庁舎の建替え検討に際して1階を多様なスペースにするかどうかで議論になったとき、過去の事例として、旭川駅前のスペースをうまく使えていないとか、フードテラスのスペースがなかなか市民が集う場になっていないといった指摘があった。市民が施設を造るプロセスに入っていく場面を十分に設けることができないまま建物が先にできてしまった部分もあり、そこが反省点だと思っている。一方で、例えば東川町の「せんとぴゅあ」は建設プロセスに町民がかなり入っており、今ものすごく成功している。やはりプロセスに市民がしっかり入っていくということが大事であると思う。

その他、ランニングコストについては、どういう建物かによっても変わるので、その点も考慮すべきと感じた。

進行役：

非常に本質的な部分で、共感するところも多く、大事な指摘をいただいたと思う。第1回会議で発言し、先程も触れたが、公共施設という視点に立ったとき、今日本の自治体はどこも財政が厳しく、人員を割けなくなっており、ではどこを削減するかというと、全員が利用しない類の建物を最初に削減するという判断になる。結果的に、劇場・ホールというのは、本当は必要であるけれども我慢しようとなってきた時代だと思う。

そうした中で、旭川市は、現時点での体力や圏域的な役割・立場を考えたとき、財政的に厳しいとしても、特定の人しか利用しないので真っ先に切っていくという判断は、まだ下すべき自治体ではないと思う。

そうしたとき、市民の方が整備、むしろ運営のプロセスにどれだけ主体的に関わることができるかという部分で、「文化」の意味を「特定の方の趣味や嗜好」というところからもっと広げていく、またアウトリーチについて積極的に考えていくことが大事だと共感したところである。

また、議論自体を慎重に行うべきということについても、非常に大事な指摘であり、そのとおりであると思う。

参加者：

主催者側の目線になってしまうが、先程から話題に挙がっているとおり、大規模改修を行う場合に、1年～1年半にわたって上川・道北地域に代替施設のない状態で休館するというというのは、非常に厳しいと思う。

また、何度も申し上げているとおり、建替えにせよ大規模改修にせよ、これから方向性を決め政策を立てて、建替え始めた、あるいは大規模改修したというところで、今度は公会堂が駄目になる。そのとき公会堂が建替えになるのかといえば、そういう議論にはまずならないと思う。そうした部分を考えて上で、建替えではないかと思っている。

また、これも前回発言したが、例えば、現在の公会堂近隣、文学資料館も含めて、それらを入れ込んだ建物として建設し、図書館からセンター通路で接続するとともに、会館や図書館に来た人が使えるカフェや飲食可能な場所を整備できると良いと思う。ただ広いだけでなく、時間的にも長い目で見て、感覚的には広い目で、もちろん市民の皆様から意見をたくさんいただいて決定すべきことと思うが、まず整備の方向性としては、現時点で私はやはり建替えだと思っている。

進行役：

立地は悩ましい問題。それぞれ場所によって特徴・メリットがあるので、指摘にあったとおり、決め打ちでここで考えていこうという話ではなく、どこに建てるかという部分についても、やはり市民と情報共有しながら議論するプロセスが大事であると思う。

参加者：

過去に旭川市の新庁舎や、北彩都の合同庁舎建設に際してユニバーサルデザインの検討に参加したが、例えば合同庁舎では、立派なトイレなのに当事者は誰も使っておらず、水を流さないと錆びるから元気な人が使っている、という話を聞いた。どこにも共通する話であるが、建物はどこも立派だと思うが、もう少し面白いことを考えれば良かったと思っている。

今後の人口減少を考えると、今は高齢者が多いが、その高齢者も減っていく。

また、今、新庁舎を建替えているが、周辺整備をもう少し綺麗に考えれば楽しかったのではないかと感じている。すごく中途半端なところに新庁舎が建っているが、仮にもっと端の方であれば、周辺をもっと整備できたのにと思う。

加えて、建物の中はユニバーサルデザインで良いが、一番の問題は外にある。バス等で行ったときに、雨に当たらずに市役所や文化会館に行けるような仕組みがあったら良いと感じる。

今は線にすらなっておらず、点でしかない状況。市役所より常磐公園の方が行きやすく、どこへ行っても不便なく過ごせてはいるが、公会堂に行くなら公会堂にしか行

かない。何か別にご飯が食べられるところがあったらいいとか、ちょっと用を足せるところがあったらいいと思うが、そうした場がない。公会堂は隣に中央図書館があるが、車で移動する私たちや、子供を連れていくときに、中央図書館より東光図書館に行った方が良くといったようになってしまう。

現在、高齢者など移動困難な人がすごく増えてきているので、公共交通機関で来てくださいといったとき、バス停からすぐ建物に入れるような仕組みをしっかりと考えたり、つながりをもって生活できるようなまとまりができれば、すごく良いと思う。

建替えかどうかについては、仮に別の場所に建てるとなっても、周りに何もなければ、また話が変わってくると思うので、やはり立地が問題になると思う。

進行役：

建物の議論をすると、その建物自体のことばかりを考えてしまうが、周辺環境との関係が大事というのは指摘のとおりであると思う。利用者の方にとっては、家から出てきてまた帰るといった生活のつながりの中で施設を利用しており、その点を考えるのはとても大事なこと。そうした気づきを含め、議論できる機会があれば良いと思う。

参加者：

一利用者として、また子育て中の市民の意見としてお話をさせていただきたい。私と同じような立場で、子育て中のお母さん方とお話したとき、「約40億円かけて大規模改修をするのと、約100億円かけて建替えをするのはどちらが良いと思う？」と聞くと、皆「そんなに費用がかかること、自分たちは必要性を感じてない。どんちょうが落ちてこず、安全に使えればそれでいい。」と話す。どちらかと聞くと建替えと答えるので、今の建物には限界があるというのは理解できるが、建替え費用を自分の子供たちが出すと思うと、それは望ましくないというのが、私が周囲のお母さんたちから聞き取った意見である。一方で、1～2年間休館するのは困るというのは、市民の側も一致していると思う。

それを踏まえた提案として、実際の使用者となる子供たちが使用したいと思ってもらえるような施設の建替えを想定し、そのための資金・材料・議論の場が出たアイデア等を全て子供たちに残す。けれども、今すぐ建替えのプロジェクトを始動し、10数年後に使えるようにするというのではなく、今あるこの在り方検討会を生かし、文化会館がある今の価値、そして、市民の間のニーズをつなげていくようなものをこの場で考えていくことができれば良いのではないかと思う。

今、この場には様々な専門の方が集まっているが、やはりこういう専門家の方が集まる機会というのは、非常に貴重な場だと思う。ほかに幾つもあるような場ではない。

今私たちが置かれている、この場所を見たとき、中心地エリアにせよ、常磐公園にせよ、木楽輪がある神楽にせよ、魅力的だと評価する一方で、せっかく総合施設のようにまとまっているのに特定の施設にしか行かないという状況があり、非常にもった

いないと感じている。

旭川には、大きく三つの文化的なエリアがあると思うが、それら全体を捉えて、市民として誇りに思えるような存在感が文化会館にはあってほしい。1,000人規模のホールというのは、木楽輪とは比べ物にならないキャパシティであり、文化会館の存在価値は非常に高いと思うので、そうした文化会館の存在感と、市民の必要性が近くなれば良いと思う。

また、具体的な提案として、学びプラス意見交換会のような、市民文化会館ワークショップを定期的で開催し、市民と固くならず話せるような場を設置してはどうかと思う。

もう一つの提案は、文化会館に来たり、こうした会議等に参加したいという子供たちを育てることである。例えば、子供たちの学芸会に際して、文化会館が中継地点となって専門の方を呼び、小学校や中学校に派遣する。そして、具体的・専門的な舞台技術を指導してもらう。そうすると、子供たちはコミュニケーションが取れるし、当然スキルも向上するし、「文化会館って格好良い」という印象をもってくれるのではないかと思う。

今までは、発表の「場」としての在り方であったが、その場所に興味のない子、例えば音楽やらないから行ったことがないといった子供たちがとても多い中で、個人の側から拾っていけるような仕組みを作ることができないだろうかと考えている。子供たちが主体であり、子供たちに寄り添う形で、子供たちが気軽に触れられるような支援ができれば良いと感じた。

最後に三点目として、音響的な観点ではクリスタルホールが一番好きで、演者の方からも演奏したいという要望が高いと聞いている。ただ、座席数の問題等の関係で、クリスタルホールが文化会館の代替えを果たすことは難しい。文化会館は、音楽的というのも良いと思うが、市民にとってなくてはならない施設という存在になると良いと思う。文化会館は市民が誇りに思える場所であるという感覚が、あまり市民に浸透してないような気がして、そこが問題であると感じた。

また、弾道ミサイルのアラートが鳴った際、地下に避難するようにとの指示が来たが、旭川市には地下がない。文化会館には半地下の展示室があるので、今後きちんとした地下シェルターとしての役割をもたせて、何かあったら文化会館に行けば大丈夫という施設にするという視点もあると考えた。防衛や防災といった機能をもたせるということも、施設の在り方を検討する上で一つの視点になり得ると思う。

それら全部を踏まえた上で、やはり建替えが良いというのが、正直な思いである。だからこそ、建替えに必要な資金や材料などを、今のうちから備えておくことができれば良いと思うが、現時点で施設建設に係る準備資金等はあるのだろうか。

事務局：

旭川市の新庁舎の場合、建設に向けて基金を作り、積み立てていたが、文化会館に

については、現時点でまず大規模改修か建替えかという方向性が決まっていないため、現状そうした基金の仕組みはない。

大規模改修か建替えか、いずれにしても多額の費用がかかるため、公共事業全体の中で調整して、市としてどの公共事業を実施していくか検討していくことになるものと考えている。

進行役：

大事なことをたくさん指摘いただいたが、特に大事だと思うのは、一般市民にとっての必要性という部分。これはすごく大事で、前回、可児市の施設を紹介したが、アウトリーチとして、今まで利用しなかった人にお越しいただき、芸術に触れていただくという、ソフト的なことも含め、工夫して運営されていた。

やはり「自分たちには関係ない」と思っている方がほとんどだと思う。そうしたとき、例えば建設費の100億円を30万人で割ったときに、1人当たりどれだけの金額になるのか、それを一生の間に利用する回数で割ったとき、納得いく金額なのかといえば、おそらく多くの方が「納得いかない」と感じると思う。これが例えば病院であれば、万が一のときにお世話になるかもしれないが、芸術文化ホールはそうした可能性がほとんどないため、いかに一般市民の方々にとっての必要性というものを、施設のコンテンツであったりプログラムであったり、あるいはそのプロセスであったり、指摘のあった学びとの関係であったりを通して、ソフトとハード、総合的に仕込んでいくことがとても大事だと改めて認識した。

追加で申し上げることはあまりないが、特に建築の立場から申し上げると、建替えの方が妥当かなと思っている。そのことを、まとめのような形でお話させていただきたい。

まず一般論として、大規模改修を行う場合のポイントは、三点あると考えている。

一つ目は、改修をして、それが今の使い方以外の使い方にも応用できるのか、用途転用の可能性があるのかという点である。原則は今のまま使い続けるが、改修して機能を変えたとしても、回していけるのかという部分であるが、この点に関しては過去に申し上げたとおり、ホールはすごく特殊な造り方をしており、学校のように他の用途に変更するというのは難しいため、改修したとしてもホールとしての使い方しかできず、ほとんど利点がない。

二つ目は、改修をすることにより、積極的に建替える時期を先延ばしにすることができるという点であり、これも一理ある。例えば、今携わっている庁舎・役場で、今の勤務スタイルやデジタル化が変化の途上であることから、在宅勤務の比率向上やペーパーレス等の環境整備が進んでいる可能性を想定し、意図的に20年ほど改修を先延ばしにしたところがある。これは、先延ばしした方が、そのときに造るものの効果や将来性が高まるということが二つ目のポイントになるが、文化ホールを先延ばしに

することで、考えることが時代的に大きく変わるかといえば、そう変わらないと想定されるため、これも大きな利点にはなり得ないと思われる。

三つ目は脱炭素であるが、これはスクラップアンドビルドの回数を減らせば減らすほど、CO₂を抑制できるので、使えるものは限界まで使った方が、基本的には良いということになる。例えば、青森県は施設の運営・維持管理に対して先駆的に取り組んでおり、現在ある施設は88年間、新たに造る施設は100年間使うという方針を採っている。あらかじめ県有施設としての大きな方針を最初に決めることで、脱炭素であったり、費用負担を抑えていくという方針であり、使い続けるということの効果はあると思うが、この点に関して、文化会館の場合には、これも結論としては大きなアドバンテージはないものと想定される。仮に建替えを先送りして、15～20年後に解体したとしても、劇的な技術革新が起こっているとは想定しづらく、建設時・解体時のCO₂を大きく削減することは難しい。今解体しても20年後に解体しても、脱炭素という観点では同様になる可能性があるため、この点に関して、20年程度先延ばしにするということに関しては、前述した2点と合わせて、あまり強調できるポイントがない。

以上の三点から、大規模改修については、積極的に行う理由が見つからないというのが私の見解である。

次に建替えであるが、こちらも便宜的に三点で考えたい。

一つ目に、まず建替えのメリットは、現代的な性能にフィットさせることができるという点である。これは今まで整理いただいたように、今不満があるところを、現代的なやり方に変えることができるというもので、例えば断熱性能に関してなどは、建替えにアドバンテージがあると思う。

二つ目は、将来を見据えた仕様にできるという点である。これも何度か発言してきたが、昔の公共施設は、最初の建築段階で維持管理・メンテナンスの仕方というものを全く考えずに造っており、長期維持プランというものを立てていなかった。現代の建物設計では、それらを考えて建てるため、昭和的な設計と令和的な設計では、随分変わってきている。そうした先を見据えた建物設計ができるという点は、建替えを行うことのメリットとして挙げられる。

三つ目は、先程指摘にもあったとおり、今後公共施設をリニューアルするときが一番大事なのは、他の公共施設との連携という点である。単体の施設として考えるのではなく、例えば文化ホール機能にしても、どこを分担して連携するのかということを考えるといった部分であるが、こうした連携の可能性は、現状の施設を使い続ける中では、あまり工夫の余地がない部分だと思う。これから人口が減り、財政負担が増えていく中で、積極的に全体の公共施設としての効率化を考えたとき、文化会館がどのような役割を担うのかというところを考えるチャンスでもあり、そうしたところが建替えのメリットではないかと思う。

以上のとおり、大規模改修を行う積極的な理由がない一方、建替えを行うメリットの方が多いいというのが、私の考えである。その上で、意見にもあったとおり、施設の種類を考えると、全市民が納得いくような、意味・意義等をどれだけもてるかという部分にかかってくる。それがなければ、約100億円をかけるという理屈が通らなくなってしまうので、この辺りの議論のプロセスと成熟というのは、今後のステップとして必要と思っているところである。

ここまで一通り皆様から意見を伺った結果として、この会は会としての結論を出す権限はないが、全体的な方向性として、積極的な大規模改修の理由付けはなかなか難しい。建替えに関しては、色々と懸念する部分や議論が熟していないところ、残された課題があるけれども、建替えを一つの方向性として考えて準備していくことが妥当である、ということかと思うが、そうした議論のを落ち着きというところで、皆様よろしいだろうか。

(参加者から反対意見なし)

3 閉会